sensu lato (Umbelliferae) based on restriction site variation of chloroplast DNA. J. Jpn. Bot. **79**: 79–90.
Miquel F. A. W. 1867. Annales Musei Botanici Lugduno-Batavi. **3**. C. G. van der Post, Amsterdam.
Nakai T. 1937. Notulae ad plantas Asiae orientalis (II). J. Jpn. Bot. **13**: 471–491.
大橋広好，伊藤隆之 2004．ナデシコ科の新帰化植物イワコゴメナデシコ．植物研究雑誌 **79**: 376–378.
——，根本智行，伊藤隆之 2003. ハギ属の帰化植物 4 種．植物研究雑誌 **78**: 50–54.
——，——，—— 2004．マメ科の新帰化植物ナガバメドハギ（新称）．植物研究雑誌 **79**: 378–380.
Ohba H. 1999. *Bupleurum* L. *In*: Iwatsuki K., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.), Flora of Japan. **IIc**: 275–277.
大井次三郎 1953．日本植物誌．至文堂，東京．
——，北川政夫．1992．新日本植物誌 顕花篇．改訂版．至文堂，東京．
Ohwi J. 1965. Flora of Japan. Smithsonian Institution, Washington D. C.
Yabe Y. 1902. Revisio Umbelliferarum Japonicarum. J. Coll. Sci. Imperial Univ. Tokyo **16** (4).
Yamazaki T. 2001. Umbelliferae in Japan I. J. Jpn. Bot. **76**: 137–150.

([a]東北大学附属植物園津田記念館，
[b]愛媛県立西条高等学校)

新　刊

□本間建彦：**「イチョウ精子発見」の検証 平瀬作五郎の生涯**　292 pp.　2004.　¥2,300.　B 5 版．新泉社．ISBN: 4–7877–0415–X.

わが国の近代植物学発展の初期，平瀬作五郎によるイチョウの精子発見は，植物系統学上の世界的な業績として知らぬものはいない．彼は東大理学部の図工だったが，用器画の教科書を出版するなど，その方面でも知られていた．ところがイチョウの業績発表の後，彼は東大を辞職して中学校の教師となり，その後は研究者としての仕事はほとんど見られないまま終わった．退官前後の事情は謎に包まれたままである．著者はノンフィクション作家としてこの点に関心を持ち，多くの資料を猟渉して推理を積み重ね，本書を公表したものである．

前半は平瀬の生い立ちから東大へ勤めるようになるまでに，彼の精神的成長に影響を与えた諸事件，とくに武士社会の崩壊，黒船による開国，明治維新などの時代背景が丹念に描写されている．後半はイチョウの精子発見のいきさつ，平瀬をとりまく人々の動き，退職から晩年までを物語る．ノンフィクションだけあって，普通の小説ならたくさん登場するであろう人物の架空の行動や心理描写は一切なく，著者の推理のみによって話が進行する．著者がしばしばこぼしているように，平瀬は自分の個人記録を残しておらず，周囲の人々による資料もほとんどない．彼の墓もどこにあるのか分からず，菩提寺とみられる福井の寺も戦災で焼失しているという．

同じ頃起こった矢田部良吉の非職とともに，平瀬作五郎の退官の事情は謎に包まれている．私も昔，国立科学博物館植物研究部に保存されていた個人の往復書簡の中に，その間の事情を知る手がかりがあるかと探ったことがあるが，得るところはなかった．本書は栄光と挫折を身をもって体験した平瀬作五郎氏の業績を，改めて想起する資料としてお薦めする．

（金井弘夫）

□吉田外司夫：**ヒマラヤ植物大図鑑**　800 pp.　2005.　¥13,000.　山と渓谷社．ISBN: 4-635-53031-8.

地域としてはパキスタン，インド，ネパール，ブータン．チベットにわたる，主として中高度から高山帯におよぶ顕花植物の，花を主体にした植物図鑑である．まず36頁にわたってヒマラヤの植物地理，ヒマラヤ山脈の地域区分，ヒマラヤの植物の水平分布と垂直分布などと題して，地域ごとの概念図を示した解説があり，ヒマラヤの地形や植物の全貌をつかむのに都合がよい．文中の植物名には図版の出現頁が一々示されており，つまりこの図

鑑からの引用だけでそういう説明ができるということである．

植物は新 Englerの逆順に配列され，解説は1,771項目あるとのことで，それぞれに写真を伴っているが，同じ種類でも花の色や生態が異なっていて複数載せられているものもあり，写真の数は2,700点餘におよぶ．植物の記述は著者の現場での観察記録に基づいたもので，花が最も美しく見える時期を主体にしており，生育期全般を対象とした一般の図鑑のそれとは別な，独自の行き方である．通常の図鑑では，写真家の作品にいわゆる専門家が同定を行って解説文をつけるのが常識だが，本書ではそのすべてを写真家の著者自身が行っている．

ヒマラヤ植物研究会のメンバーである著者は，この図鑑の製作のため，ときどきインドに出入りしてビザを更新しながら，ネパールに8年間住み続けたという．おそるべき勉強と執念の産物と言うべきだろう．多くの人の手に渡って，ヒマラヤのみならずアジアの植物の理解に貢献することが期待される．巻頭4頁に，ヒマラヤの植物研究史と題する大場秀章氏の一文がある．　（金井弘夫）

□白山高山植物研究会編：**白山麓における高山植物の馴化試験**　161 pp．2005．A 4 版．石川県環境安全部自然保護課，白山市．ISBN: no number.

石川県白峰村（現在は合併して白山市）は1998年以来，清水建美氏の指導の下に，白山の高山植物の栽培・馴化の試験研究を進めてきた．これは8年間にわたる成果の報告である．

白山は2702 mという「高山」にしては低い山にもかかわらず，特異な植物を多く産することで知られている．最近の地球温暖化の傾向から見て，たかだか300 mの幅しかないこの山の高山帯は，あと100年足らずでほとんど失われてしまう心配がある．このために，現に生育している植物種をなんとか保存する方策を探るというのが，この事業の目的であった．

現場を乱さないため，材料はすべて種子を採取し，山麓に圃場と温室を設け，発芽から苗の育成，開花に至る迄が観察記録されている．高山植物の栽培というと，花の美しいものに偏りがちだが，イネ科やスゲ科も扱われている． 発芽には人為条件を避けて，極力自然状態に置く努力がなされており，さらに圃場から露地栽培へと移行させることが試みられている．こうして生育保存に成功した中から，174種類がカラー写真で示され，発芽や生育のよしあしや病虫害の状況などが簡単に記されている．とくに，発芽直後の実生の写真は，あまり例のないものだろう．草本類の多くは，開花にまで至っている．白山のブナ帯以高に生育する545種類のうち，テストしたもの418種類．そのうち発芽したもの86 %，開花に至ったもの38 %で，継代的に開花結実する種類も増加しているとのことである．従来型の「自然保護」とは異なり，対象地域の植物群全体を保存するという新しい試みであり，今後の展開が注目される．

本書については，奥付にある白山市自然保護課では情報がなく，白山市白峰支所（tel 0761-98-2011）に問い合わせたところ，一般頒布の計画はなく，地域図書館での閲覧は可能だろうとのことである．　（金井弘夫）